

第 26 回 再び直球・変化球

人間は誰でも程度の差はあれ、専門家とまではいかないような楽しみ事としての趣味や、たしなみ好むことというような嗜好などを多少は持ち合わせているものである。ゲームやスポーツに限ってみると、筆者もそれら趣味や嗜好は人並みに持っていると思うが、それらを挙げるとすれば、将棋、ゴルフ、野球などの類であろうか。ここで挙げた野球は、自らプレーするというよりも長年にわたって興味が持続して今や身についた楽しみということの方が正しい。将棋やゴルフ以外でも囲碁やマーじゃんなどはこれまで人並みにお付き合いしてきたものの趣味としての域には達していない。

将棋は手ほどきを受けた記憶がさだかだけでなく、太平洋戦争終戦後間もない小学 5,6 年生の頃、当時自宅続きの父の店に商売で出入りしていた小父さん達が指していたのを見様見まねで覚えたような気がする。将棋を覚えてから、7 年前に他界した 3 歳上の次兄や友達や、商売の小父さん達と数え切れないほど指して腕を上げた。中学低学年の頃、アマチュア将棋の仙台青棋会というのがあり、その会が主催した大会で初段までのクラスで三位入賞したこともあった。大会準決勝では初段を相手に中盤まで圧倒的優勢であったが、残念ながら終盤で大きな見落としをしてしまい負けてしまった。油断大敵、対戦相手の最終手を全く見落としとしており、悔しくてその時の相手の 5 九金は今でも思い出すほどである。大学医局時代になると、医局内には滅多に勝てなかったような有段者がいたが、筆者と同じ位に指すような同僚もいた。ある時は市内病院日当直中に退屈で同じ医局同級生 K 君を電話で呼び出し、当直室で 10 番将棋を指して 10 連勝したこともあった。大学院修了後の米国での研究生活から帰国してから、将棋を指す機会が殆どなくなってしまい、現在は趣味の持ち腐れの様な状態になっている。息子たちにも教えたが、将棋という勝負事は彼らの性には合わならしく、間もなく飽きられてしまった。

筆者のゴルフ歴は、1971 年から 1999 年頃までである。1970 年から 2 年間カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) の関連病院であるシダーズ・サイナイ・メディカルセンター胸部心臓血管外科研究員として家族とともにロサンゼルスに住んだ。当時シダーズには日本からの研究員が数人おり、センター近くの小児病院や少し離れたロングビーチのハーバー総合病院や南カリフォルニア大学 (USC) などを合わせると、すぐにでも往来可能な友人が 10 人位はいた。筆者たちの実験棟は保安の関係から夕方 5 時には閉鎖されたため帰宅せざるをえず、それだけ自分の自由時間が増えた。ゴルフはロサンゼルスダウンタウン近くに住む日本人のレッスンプロから家内とともに手ほどきを受けた。毎回 9 番アイアンの打ち方が最も基礎的なものとして、それだけを集中して教えられた。レッスン期間中からコースに出

て、週末になると毎週のようにシダーズや小児病院の日本人仲間たちとプレーをしたし、週末以外でも夕方になるとしばしば近くの練習場に通ったものである。ロサンゼルス時代の数多くのプレーのなかで特別な出来事といえば、一度 360 ヤードのホールでイーグル記録したことであろうか。1972 年帰国してからは当然のことながら多忙となり、めっきりゴルフができる機会は少なくなったが、それでも熱心な仲間がいて、しばらくは何とか続けることができた。コースが開いていれば真冬でも行ったものである。やがてまれに週末や連休に漸くプレーする位の状態になってしまい、みるみるハンディが落ちた。時代が平成になってからはゴルフどころではなくなり、年に数回程度になってしまった。その反面ゴルフ道具だけは増え続け、今ではそれら全部が物置のなかで埃をかぶっている。退官前の 1999 年頃から足腰の故障と称してゴルフから遠ざかってしまったが、最近になってそれなりに見合った仲間を見つけてゴルフを再開したいと考えている。

野球、プロ野球から終戦後の日本で再開された筆者が小学生の頃からこれまで変わることなく親しんでいる。1945 年 7 月 9 日夜の仙台空襲の翌日、仙台からひと山越したところへ疎開し、1 年足らずで、周辺にまだ家が疎らで雑草だけが目立つ焼け野原といってよいような市内夜景のなかに再建されたわが家へ戻った。野外でドラム缶の五右衛門風呂に入ったのもこのころである。東四番丁という市内のほぼ中心部にある我が家も、通学していた東二番町小学校(当時は東二番町国民学校)校舎も市電環状線のなかにあったため、空襲が特に集中的に激しく、ほぼ完全に焼き払われた。広々としたその辺り一帯の焼け跡は我々子どもたちの格好の遊び場ともなった。わが家から一丁ほど西の東三番丁にある歯科医院の二男が当時小学校同級のガキ大将で、彼の周りに集まって日が暮れるまで遊んだものである。彼は現在、一番丁に義歯研究所を構える歯科医で、筆者の主治医でもある。終戦直後野球を始めたころはグローブもボールもバットもすべて自家製だったが、日本でプロ野球が再開されてから 2 年後の小学 6 年生の頃には、世の中に急速に野球熱が高まり、本革のグローブやミットを持っている子どもも多くなった。野球は男の子供たちが誰でもできるような身近なスポーツとなったが、それにはひとつに日本プロ野球が再開されたことが大きく貢献している。筆者の 10 代前半の頃は川上、青田、千葉、大下、藤村、若林、別当、土井垣、別所、杉下などなど、今では伝説的な名選手が数多くいた。その後の長嶋や王は同世代であり、筆者もまた「巨人、大鵬、卵焼き」が好物であった。

筆者の野球好きは要するに自身がプレーするということよりも、小学生の時以来変わらない巨人軍の存在がその底にあるためである。自分自身の野球歴には誇れることよりも苦い経験の方が多い。小学 6 年のころに一度だけピッチャーズマウンドに立ったことがあるだけだし、医学部教養学部時代の学部対抗戦でセンター前ヒットをエラーでランニングホームランにされたことや、教授になりたてのころ、試合でヒットを打つには打ったが、1 塁までがひどく遠かった記憶がある。

筆者は、今ではスポーツのなかで野球は総合的にみて最も人間らしい競技のひとつではないかと思っている。縫い目のあるボールを幾通りもの方法で投げ、それをバットという道具で打ち返す一方、それを9人のチームで守る、という競技には毎回同じようなことは起こらないし、結果を前もって想定することもできない。かつて投げる球種が多いピッチャーは七色の変化球を投げるといわれたが、現在のプロの水準では、筆者が思い出すことができる球種は直球のほかに、カーブ、ドロップ、スライダー、シュート、シンカー、カットファストボール、フォークボール、スクリーボール、チェンジアップ、ナックルボール、などを含めて10種類以上ある。しかしながら、七色の変化球にしても現在のそれ以上の球種の変化球にしても、もしも一人のピッチャーが全種類は投げることができるとしても、それを続けると腕や肩が疲労してやがて壊れてしまう。これまで名投手と言われた選手は、切れのよい速球とともに、数種類の変化球を磨いて自在に投げる技術や打者の心理を読む能力などを身につけて投げ続け、長年その栄光を維持してきたのである。フィールディングやバッティングも基礎的には決まった技術はあるが、本人の才能を掘り起こし、あるいは掘り起こされた本物の努力家こそが名選手となるのであろう。

野球でのピッチャーとバッターの対決にかつての剣豪同士の戦いを時に想起させることがある。そのような雰囲気醸し出すような選手は数少ないが、現在のいくつかの球団にはそれらしいと感ずることができるものはいるようである。

このようなことを時折考えながらプロ野球中継を観戦しているこのごろである。